
ひぐらしのなく頃に白 人隠し編

kai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に白 人隠し編

【NZコード】

NZ8333N

【作者名】

kai

【あらすじ】

ある日、この雛見沢に2人の転校生が引っ越して来た。1人は明るく1人は暗い対称的な2人だった。しかし、ちょうどその頃、雛見沢に大きな出来事が・・・

新たな（前書き）

みなさん、おはようございます。じんにゅうま。じんばんは。どうも
k a i です。新しい物語を作つてみました。暖かい日で見てやって
ください。

新たな

主人公

かみじはく
神寺白

転校生の1人、明るい性格で辛い物が大好きな女の子。ちなみに彼女は、中学3年生。

きじんくろ
鬼神黒

転校生の1人、暗い性格で苦いものが大好きな男の子。彼も中学3年生だ。

光があれば闇がある・・・陰があれば陽もある・・・人間も同じ・・・
・幸せになる者もいれば不幸になる者もいる・・・それが全ての法則。

白 side

私は、かみじはく神寺白。千葉県からやつて來た。両親は私が幼い時に交通事故で他界した。私は、おじいちゃんとおばあちゃんが離見沢に住んでいるのでそこで引き取つてもらうことになった。そして今、着いたところだった。離見沢に来て最初に言つた言葉は、

「離見沢は、空氣がおいしいな～」

私は、そう言つておばあちゃんとおじいちゃんの家に向かつた。行くまでにかなりの時間がかかつた。

そして・・・ようやく・・・着いた。長かった！！実際に長かった！
！もう・・・動けない・・・その時、おばあちゃんが出てきた。

「あーー田中さんいらっしゃい。疲れたでしょ？お風呂沸かしてあるから入っておなさい」

「あつがとつ、おばあちゃん」

私はお風呂場に行き汗でベトベトな服を脱ぎシャワーを浴びた。そして、パジャマに着替えて間に行つた。そこには、おじいちゃんがいた。

「おじいちゃん」

「ねえ、田中！」

おじいちゃんは、驚いたよつて言った

「久しぶりだね」

「そうだな～」

それから、色々と話が弾んだ。千葉のことや友達のことなど。そして、思い出した。確かに最近私の友達がここに引っ越ししたと聞いた。

名前は・・・えーと。あつそりだ！！確か本性クロト（ほんじゅうくろと）君が来てたんだー！

本性クロト（ほんじゅうくろと）君とは、昔、私が東京にいた頃、

「近所にいた内気な男の子だった。よく遊んだつけ・・・元気にしてるかなー その時、おばあちゃんがやつて來た。

「夕飯ができましたよ~」

「やつたーお腹空いてたんだー!ー

「おお、飯か

夕飯を食べた後、私は明日の学校の準備をした。そして、すぐに寝た。朝はさわやかに起きた。そこにおばあちゃんが現れてこいつ言つた。

「田中さんおはよう~朝!」せん準備してあるからね

「うそ、あいがどつ

私は、朝ご飯を食べ終え顔を洗い歯磨きをして制服に着替えおばあちゃんにこいつ言つた。

「行つてきまーすー!ー

新たな（後書き）

ちなみにこの物語は、「ひぐらしのなく頃に生」と「ひぐらしのなく頃に死」の続編です。

初めまして

私は今、学校の中の職員室前にいる。とても緊張していた。しかし、深呼吸をして心を落ち着けて職員室のドアを開けて私はこう言つた

「失礼します」

そしたら、女の先生らしき人が現れてこう言つた

「初めまして、担任の知恵です」

「初めまして」

とても優しそうな先生だなーと思つた。そして、知恵先生が言つた

「神寺さんはそこのイスで待つてください。まだ、あなたの他にも転校生が来るんです」

初耳だった。私の他にも転校生が来るなんて。しばらく待つと、ガラガラとドアを開ける音が聞こえた。振り向いて見ると、そこには男子が立っていた。やしづめこの子が転校生だと分かつた。すると、知恵先生が

「では、教室に行きましょう。神寺さんと鬼神くん付いて来てください」

私は、「はい」と言つたが、鬼神君は何も返事がなかつた

教室の前に立つて、また緊張感に襲われた。だけど、鬼神君は大丈夫そうに見えた

そして、先生が教室に入った瞬間、先生の顔に雑巾が投げつけられた。パアーンものすごい音が鳴った。先生の前には、私と同じ年くらいの男子がいた。その男子は、苦笑いしながら先生を見ていた。

「前原君・・・これは一体どういうことですか？」

先生は、体を震わせて言った

「前原君！――後で職員室に来てください――！」

大丈夫なのかな――このクラス・・・私は、心配になった。先生は、若干怒りながらもこう言った。

「今日は、2人転校生が来てします。では、神寺さんと鬼神君入ってきてください」

教室の中に入つたら、みんな学年がばらばらで驚いた。そんなことを思つてる時に、知恵先生が言った。

「では神寺さん血[口]紹介してください」

「はい！…私の名前は神寺白です。好きな物は辛いものです。みんなよろしくね！…」

その瞬間、大きな拍手が出てきた。

「次は、鬼神君お願いします」

「…・鬼神黒・・・よろしく」

クラスがざわざわしだした

「はい、静かに！…では、神寺さんと鬼神君はそこに座つてください

「はい」

「では授業の方を始めたいと思います」

遊び

授業が終わって教材を片付けていた所、緑色の髪をした人が私に話かけてきた。

「ねえ、おじさん達のゲーム部に入らない？」

ナンパするよつた言い方だった。しかも、自分のことをおじさんで

「ゲーム部？」

「ただゲームをするだけの部」

なぜ女なのにおじさんていうの？ そつ悪いながらも私は、

「うん、入る……」

そしたら、緑色の髪をした子は

「よつしやー部員GET！ あつそつだ、名前忘れてたおじさん
の名前は園崎魅音そのざきみおんで言ひの。よみしぐね」

と言つた。私も、よみしぐねと言つた。

「じゃあ、ここで待つていじ。」

魅音ちゃんは、そう言つと今度は鬼神君の所に行き部活の勧誘をしていた。とても喜んでいた。と言つ事は鬼神君は部に入ったみたい。

魅音ちゃんが

「全員集合！！」

て言つたので私は魅音ちゃんに呼ばれて行つた。そして、魅音ちゃんは部活メンバーらしき人達に

「我が部に新メンバーが加わった！！神寺白ちゃんと鬼神黒君だ！」

みんなは、拍手して私達を歓迎した

「ではみんな各自自己紹介して」

「じゃあ、俺から・・・俺の名前は前原圭一まえはらけいいち」

— ၁၂၅ —

「次は、レナの番だね・・・竜宮レナ（りゅうぐうれな）だよ。よろしくね」

「ヘンツル」

「次は、ぼくの番です。・・・ぼくの名前は、古手梨華なのです。
よろしくなのです。」

「次は、わたくしですわね。わたくしの名前は北条沙都子ですわ。ほくじょうさとこ

以後お見知りおきを

「よろしくねーーー。」

「では部活恒例のあれをやりますか」

「え、あれって何?」

私は聞いた。そしたら、圭一君が説明した

「あれひと声のはいわゆるジジ抜きだ。俺が入った時もやつたぞ！ちなみに負けたらひどいめにあうから覚悟しといた方がいいぞ」

「ひびこめつてびつぱんつー」と。

「つまり、1位になつた人はビリになんでも命令できるんだ」

「ちなみに・・・俺は・・・連続で最下位だからいつも・・・耐え難い屈辱を・・・受けている」

圭一君は、泣きながら叫んだ。

「そうですか・・・」

そして、ジジ抜きが始まつた結果、勝者は魅音ちゃん敗者は圭一君だった。魅音ちゃんは、圭一君に女子のスクール水着を着て帰れと言つ命令だつた。私は、ようやくこのゲームの恐ろしさを知つた。そういうえば、聞くことがあつた。それは・・・本性クロト君のことだつた。思い切つて聞いてみた

「ねえ、本性クロト君確かにここに引っ越したらしこんだが今日、
休み？」

みんなはびっくりしたような顔だつた。

「田中さんは、クロトちゃんの知り合いなのー?」

「う・・・うる

罪悪感

みんなは驚いた顔をしたと思つたら次は暗い顔になつた。その表情は、私を不安へと変えた。何でみんな黙つてるの?そう思つた。そつすると魅音ちゃんがなぜか泣きながら言つた。

「死んだんだよ・・・私のせいだ」

「え・・・どういって?」

「私がちやんと周りを見ていなかつたから・・・クロウちゃんが・・・クロウちゃんが・・・」

魅音ちゃんは取り乱していた。

「魅音落ち着ナ!」

圭一君がそう言って魅音ちゃんを落ち着かせていた。

「由、来るのです」

梨華ちゃんが私を呼んだ。訳が分からなこまま梨華ちゃんに廊下へと連れて来られた。

「由・・・」JのJとはなるべく魅いの前で言わないで欲しいのです

「何で？」

「魅いは自分のせいでクロトが死んだと思つてゐるのです。今も自分がこと責めているはずなのです。だから言わないで欲しいのです」

そ・・・そんna・・・クロト君が死んじやつたなんて・・・私は、涙があふれてきた。しかし、涙は流さなかつた。だつて私が泣いたら魅音ちゃんがもつと自分を責めることになるから私は流さない！そして、冷静になり梨華ちゃんから全てを聞いた。クロト君がここに来て変わつたことやクロト君の最後を・・・そして教室に戻つた。魅音ちゃんは、ずいぶんと落ち着きを取り戻していた。私は魅音ちゃんの所に行つて謝つた。

「『めんね、嫌な』と思ひ出されちゃつて・・・」

「うそ、いいよ。じつちも『めんね取り乱しちやつて』

いつつて私の一日は終わつた。

? side

「はあ～めんじくせえ～やるのはいいけど準備するのがめんじくせえ～よ～し～！今日の仕事はこれで終わりだ～明日が楽しみだ～！人が恐怖に引かつかる顔を見るのは格別におもしろい・・・そういう

ばこの土地に神がおつたなあ、神の一人としてあいさつをしなく
ちゃな・・・ていうか俺が騒動を起こせば向こうから来てくれるか・
・」

俺はそう言つと暗い森に入つて行きましたとさ。

罪悪感（後書き）

ちょっと文が短いですが、「了承ください。」

グシャ・・・グシャ・・・何か聞い&る。よく見ると誰かがバットを振り上げて・・・そして、振り下ろす・・・その度に、グシャ・・・グシャ・・・そのくり返し。何をやつてるんだろつ・・・と思いつ床を見てみると、変わり果てた姿になつた魅音ちゃんとレナちゃんだつた。こんなことをするのは誰?私はバットを持った人の顔を見た。そんな・・・そんな・・・圭一君?

「いや――――――――!」

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・夢?」

何・・・今のは?とても夢とは思えなかつたほどリアルだつた。そして、私は深呼吸して心を落ち着かせた。そして、時計を見てみると、

「やつばーー寝過!した――!」

私は急いで髪を整えて顔を洗い制服に着替えておばあちやんが作ってくれたお弁当を持つてそして、食パンをくわえて学校に行つた。何とか無事に教室に入つた。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・危ない・・・危ない

「田中やとおはよへへ

魅音ちゃんが笑顔で言つた

「お・・・おおおお」

「はーー疲れきった白ちゃんかあいーよーお持ち帰りいいー！」

助けて・・・息が・・・できない

「お二、レナ……虹が掛っちゃうだぞ。」

ג עי. עי. עי.

良かった・・・昨日と同じだ・・・しかし、あの夢は本当になんだ
つたのか?

お昼ご飯

私は、みんなとお弁当を食べた。そして、今日の夢をみんなに話した。

「え――――!? 私とレナが圭ちゃんに殺される!? ちよつとやめ

てよ縁起でもない」

魅音ちゃんが笑いながら言つた。みんなも続いて笑つた。一人を除いて・・・一人は鬼神君、興味なさそうにお弁当を食べていた。二人目は、梨華ちゃんだった。真剣に私の方を見ていた。そして、食事の後に、梨華ちゃんに呼び出された。

「詳しく述べ欲しいのです。その夢のこと・・・」

「別にいいけど」

私は、細かく説明した・・・

「どうもありがとうございます」

「どういたしまして」

その後、部活動を始めようとしていた時、知恵先生がものすごい勢いで「これから来て」と言つた

「今すぐに部活動を中止にして家に早く帰つてください……」

「な・・・何でですか？」

魅音ちゃんが聞いた。

「町の人気が次々と行方不明になつてるんですーー！」

失踪

私はそれを聞いておじいちゃんやおばあちゃんのことが気になった。

「大丈夫かなおじいちゃんとおばあちゃん・・・」

「大丈夫だよとにかくどれだけの人に行方不明になっているんですか？」

魅音ちゃんはそう言った

「人数はつきりとは分かりませんが数十人が行方不明になっていると聞いています。気を付けてください」

「はい、分かりました・・・じゃあみんな今日の部活はなしつつということです！」

いつもして私達は解散した・・・

梨花 side

今日はおかしなことばかり。白は別の世界の圭一の結末を夢で見る
そして、村人が失踪するし。

「羽入一体何がどうなつてているの?」

「あうあう～それはぼくにも分からぬのです」

「まつたく、神様のくせに何で分からぬのですよ!」

「はう～申し訳ないのです。でも、ただ一つ言えることは村人が次々と失踪するなんてそう滅多に起きることではないのです」

「ということは誰かが仕組んだのね。でも、それだったら大規模な人数が必要でしょ」

「はい」

「でも、そんなに人数がいたら目立つじやない」

「はい、そうです。だから犯人は一人でやつたのです」

「何言つてるの?たつた1日でこんなにも人がさらえるわけないでしょ」

「それは人だつたらの話なのです……」

「え・・・犯人は人ではないってこと?」

「そうです」

「じゃあ犯人は何者?」

「たぶんぼくと同じ力を持つた者です」

「それって・・・まさか!?!」

「はい、神です」

失踪（後書き）

今回は、ある人の依頼で羽入を出してみました。

正体

白 side

カキン・・・キン・・・何この金属音・・・私は、音がする方へ見てみると誰かが学校の屋根で戦っている・・・1人は鉈なたを持ち1人はバットを持っていた・・・よく見ると圭一君とレナちゃんが戦っていた・・・なぜか2人は笑っていた・・・

「2人共何やつてるの?危ないからやめて!!」

・
2人は聞こえていないようだった・・・そして2人は動き出して・・・

「はつ、また変な夢・・・一体何なの?」

私はまた眠気がきて寝た

? side

「まだかな~早くしないとさらった村人達の命はないんだけどな~」

「さてと、暇だからもう一度村人をさらいに行くか~」

俺はそう言つとすう~と消えていきました。

「ふあ～あ・・・よく寝た。よし、準備するかー！」

私はとつとと準備をして学校に行つた。行く途中、突然頭痛がきた。

「イタツ、頭が・・・」

その時、頭から色々なイメージみたいなものが流れてきた。そして、分かつた。私が今まで夢で見たものが何なのか・・・そして、梨花ちゃんが何者かが・・・私は学校に着いて走つて教室に行つた。

「お~丑吉君 お出でやう」

魅音ちゃんはテンションがすゞしく高かつた

「うん、おはよ。梨花ちゃん・・・ちよつといい?」

私は梨花ちゃんを廊下に連れ出した

「み？何なのですか」

「分かつちやつたんだ梨花ちゃんの正体が」

「！？」

「梨花ちゃんは他の世界でも圭一君達に会つてるとんだけよね」

「何で・・・そんなこと知つてるの？」

急に梨花ちゃんの言葉づかいが変わった

「だつて私そこにいたから・・・」

「あなたは何者なの？」

「私は、神の1人」

「といつ」とはあなたは人をさらつたの？」

「いいえ、それは私じゃない。でも、邪悪な何かを感じる。それで

しょ、羽入ちゃん

「え・・・何でぼくの名前を・・・」

「私・・・梨花ちゃんと羽入ちゃんの話を聞いてたんだよ」

「はう～そうだったんですね。確かにぼくも、何か嫌なものを感じていました」

「私の予想だけどその邪悪なものは私達の近くにいる」

正体（後書き）

ちょっと短いかもしませんが、ご了承ください

作戦

「私達の中の近くにいるですか？」

「うん、そしてそいつはまた事件を起しますと感ひの・・・」

「またー?どうするつもりなのー?」

「私に考えがあるの・・・」

「何?」

「それは犯人が人をさらつまで待つの」

「ただ見てりつて言つ的一ー」

「梨花、落ち着くのです・・・」

羽入ちゃんが言った

「私のプランはこいつ、そいつが村人をさらつたその瞬間を狙つ」

「でも、どうやって犯人を探すのですか？」

「そうよ、それが出来なきや 事件の止めようがないじゃない！」

「それも考へてある、私達神は力を使う時に形跡を残すの、それで
探せば分かる」

「じゃあ昨日の事件だつたらすぐに分かつたんじゃないの？」

「その時、私は記憶が戻つてなかつたから分からなかつたの」

「なるほどね、でも神である羽入も氣づいたんじゃないの」

「さうですよー何でぼくは力の存在に気づかなかつたのですか？」

「それは・・・羽入ちゃんはたぶんかなり前に生まれた神様だから
力の存在に気づかなかつたと思つ」

「ふふっ、つまり年寄りは感覚がにぶいということね」

「あー・・あーひびこですよ梨花あー」

「分かったわあなたの言葉を信じる」

「あいがどう・・・じゅあ教室に戻ろつか

「分かった」

「うして話が終わり教室に戻つていった。」

「田中やへんぢうしたの?」

いきなり声をかけてきたのは魅音ひやんだった

「何でもないよ」

「ふうへんそうなんだ」

いきなり魅音ひやんの田つきが変わつていつた

「私達、仲間だから隠し事はしちゃ、嫌だよ」

「うわ～何度も見るけど怖いな～

「大丈夫だつて！！」

「せつ、ならいいや

ゲーム

私は授業後、早速作戦を実行した。事件が起きたのにそう時間はからなかつた。すぐに力を使つたのが分かつた。場所は神社だつた。私は、すぐに現場に行つた。そこには、梨花ちゃんと・・・鬼神君？鬼神君は見下すようにこちらを振り向いた

「よお、田さん」

「鬼神君・・・何やつてたの？」

「何つて人を消してたに決まってるじゃん」

「じゃあ・・・あなたが犯人？」

「あつはつはつは！――！――せ――か――い読者が予想してるように俺が犯人だ！！」

鬼神君は、この世の者とは思えない笑い方をして言つた

「全くなぜ最初に気づかないかな～お前ら神様のくせに鈍感だな～」

「つむさーのですーとにかく消した村人を解放するのですーー。」

「無理だな・・・だつて俺の力を増幅するための人柱にするからぞうふく」

「え・・・？」

「知ってるか？神の力を上げるには人の肝きもが必要なんだよ。だから返せない」

鬼神君は、ニヤニヤ笑いながら言った。その時、私の後ろから誰かが来た。

「田中ちゃん、これは一体どういつ事なの？」

そこには魅音ひやんとレナちゃんと沙都すみやんと圭一君だった

「お～これはこれは部活メンバー諸君じゃないか～」

「魅音ひやん何で！」「……？」

「田中ちゃんが怪しいからギーとついてきた」

「ははっこれで役者はそろったーーまつ、本当はそろえるつもりはなかつたけど」

「わ～てどじやあ折角なんでゲームを始めたいと思いますーーー」

「ゲーム？」

「さうだ、ゲーム部だったりやるよな？」

「分かった」

「もう来ると思ったよ。じゃあやるのは…・・・缶けりで」

「缶けり？」

「そうだ…・・・ルールはこうだ。まず俺が逃げるそしてお前らが俺を探す。範囲はこの神社一帯だ」

「それだけ？」

「ああ、ちなみにタイムリミットは一日だ。もし時間内に俺を捕まえないとこの世界は俺の者…・・・もし、俺を捕まえないと本性クトトに関する情報をお前らに教へる」

「本性君って…・・・あれはただ通り魔に襲われただけでしょ？」

「ははっ！、バーカこんな田舎に通り魔が登場すると思つた

（）

「もしかして…・・・」

「お～とわね以上書つたよ～読者にももがんばつて推理をせいやんな
よ。」

「あなたは何者なの？」

魅面ひやんが書つた

「ん？ 何書つてるんだよ俺は鬼神黒だよ。じゃ……」

「うづうづと鬼神君は走つてどりが行つてしまつた。この勝負何としてでも勝たなあやー！」

ゲーム（後書き）

徹夜して考えました・・・たぶん誤字脱字等あるとおもいますが、了承ください

事実

私達は、神社の入り口あたりに缶を置きそれぞれ探しに行つた。私は、神社の中を探していた

「ビ」にもいない・・・

私は、そう呟くと誰かが、いたぞ！...と言つ声が聞こえた。私は急いで缶の所に行った。そこには鬼神君がいた。鬼神君は私が来たのを感じつて缶を蹴つた。缶けりは鬼が缶を蹴られるとしばらくの間動けなくなる。ちなみに鬼は普通1人だけど今回は私達が鬼で鬼神君が逃げる方なのだ。私は缶を元の場所に置いた。しばらくすると、魅音ちゃんが来た。

「黒君は見つけた？」

「うん、見つけたけど缶を蹴つて逃げられちゃつた

「そうか~

魅音ちゃんは難しい顔をしながらそう言った

「あつー!だつたらレナに良い考えがあるよーー。」

「「「えつー?」」「

「ふう〜暇だな〜あいつら本当に俺を捕まえられるのか？あっちで神2人がいるから大丈夫だと思ったけど・・・期待はづれだな」

俺は、今神社の屋根にいる。あいつらが全く俺を捕まえられなくて俺はしばらく寝ていた。それから、どれくらいの時間がたったんだ？あたりはだいぶ暗くなっていた。俺は、時間を確認した。・・・残り一時間か・・・俺は最後くらい姿を見せてやっても良いか・・・と思い。あいつらを探していた、そしたら、圭一を見つけた。

「おーい、俺はこゝだぞ〜」

と言った。そしたら圭一は振り向き・・・

「あつ！見つけたぞ！〜」

俺はダッシュで缶の所に行つた。その時！俺はなぜか知らんが落ちた・・・

「なつ〜これは一体どつこつことだ〜！」

よく見るとこれは落とし穴だった。その時、「黒君み~つけた」と誰かが言った

そこには、レナがいた

「おこ〜れはどうこうだよーー！」

「だつてルールにはトラップを使っちゃいけないなんて言ってなかつたでしょ。だからトラップの申し子沙都子ちゃんに頼んだんだよ」

「くそ……」

「俺としたことが沙都子のことすっかり忘れていた……何度も体験してるのになぜ気がつかない……！」

「分かつた……俺の負けだ」

「俺は落とし穴から出てこいつ言つた

「クロトのことを話してやるから全員呼べ」

「そして、レナははつなづいてみんなを呼びに行つた。しづまくしてみんなが来た。

「よ～し全員そろつたな～じゃあ話すぜクロトのことを……」

「みんなは真剣に俺の方を見ていた

「まず聞くがクロトの犯した罪はお前ら知ってるな

「それって確か友達と話してる途中に通り魔が出てきて友達を殺して自分が襲われそうになつて手元にあつたガラスで犯人を刺して事件にならなかつたやつでしょ？」

魅音が聞いてきた

「ああ、そうだ

「それが何？」

「あの話を聞いておかしいと思わなかつたか？」

「うん、思つた。だつて人を殺したら絶対に警察が動くに決まつて
る」

「何で警察が動かないのか・・・て言うとな、俺が裏で手を引いていたんだよ！！」

「え？」

「あははははっ！…全く笑えるよな～全部俺がやつていたんだよ！」

「ああ、そうやつ。ちなみに

クロトを殺したのも・・・俺だ」

「えー? だってクロトちゃんは通り魔に殺されたんじゃ・・・」

「あつはつはつはつ! ！ そだろうなー目の前で死んだもんなんでも違ひんだよ。俺は近くにいた村人を操ってクロトを襲わせたんだよーー！」

「よくもクロトをーー！」

「どうしてクロトを殺したの?..」

梨花ちゃんが言った

「はあ~? 決まってるじやんあいつ友達はもう作らないと決めておきながら友達を作つてそして最終的には自分は幸せになるってそんな漫画みたいな展開にじょうとしやがつて・・・ふざけんなよーー! 俺は認めねーだから殺してやつた」

「そんなくだらねえ～ことのためにクロトを・・・」

圭一はそう言つと俺に殴りかかってきた。まあ～簡単によけてやつたがな

白 shade

全部鬼神君がやつたことなの・・・!?

「全く笑つちやうよ
な～自分のせいで友達が死んだとか人を殺してしまつたとか、全部
俺が仕掛けたことなのにな～」

「笑うな!!」

魅音ちゃんが今まで見たことのないぐらじゅうじい剣幕けんまくで言つた

「何でだよ普通にこいつは笑つとこりだろ」

「クロちゃんさんはすーと苦しかったんだ！自分のせいで友達が死んじゃってそして、犯罪者とはいえ人を殺して・・・やがって真剣に悩んで苦しんでいたクロちゃんを笑うな！！」

「ぐだりうね・・・じゃあ、俺は帰るから」

その時、魅音ちゃんが

「近いに必ずお前を殺してやる・・・」

魅音ちゃんは「ここ田つきで言つた

「ああ、やつてみる」

そして、鬼神君はどかへ消えていった

黒幕（後書き）

待たせてしまいました。申し訳ありません。時間の都合でかけなかつたんです。次の投稿は、23日とさせていただきます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3833z/>

ひぐらしのなく頃に白 人隠し編

2011年12月20日17時51分発行